

ヨハネによる福音書5章19-47節 「イエスの裁き」

1A 父と等しい方 19-30

1B いのちを与える力 19-21

2B 裁く権威 22-30

1C 子への敬い 22-23

2C 永遠のいのちに至る救い 24-26

3C 体のよみがえりによる裁き 27-30

2A イエスについての証言 31-47

1B 他に証言する者 31-40

1C バプテスマのヨハネ 31-35

2C 良いわざ 36

3C 父なる神ご自身 37-38

4C 聖書 39-40

2B 父から受ける栄誉 41-47

1B 人からの栄誉 41-44

2B 訴えるモーセの律法 45-47

本文

ヨハネによる福音書5章19節からです。午前礼拝で、1節から18節まで読みましたが、ペテスダの池で病の人を立ち上がらせました。それが安息日だったので、ユダヤ人の指導者たちはイエス様に迫害を始めました。ところが、安息日だけに終わらなかったのです。イエス様がこう言われました、「5:17 わたしの父は今に至るまで働いておられます。それでわたしも働いているのです。」父が働いているから、わたしも働いている。すなわち、天地創造の全能者であられる神を自分の父として話して、ご自身が神なのだということを言っておられたのです。それで、彼らはイエス様に対する殺意をますます抱くようになりました。

1A 父と等しい方 19-30

そこでイエス様は、ユダヤ人指導者たちに、ご自身がいかに神と同等なのかを語られます。そして、彼らはイエス様を殺そうとまで考えましたが、むしろ彼らが、神に与えられた権威でイエスに裁かれなければいけないことになる、イエス様が警告していかれるのが、次からの文章です。5章の後半は、三位一体の神の中で、どのように父と子が関係を持っているのかを、イエス様ご自身の言葉から見る事ができる、貴重な箇所です。そこから、私たちが、主イエスにあって神との関係をどのように持っているのかも、推し量ることができます。

1B いのちを与える力 19-21

19 イエスは彼らに答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様にを行うのです。20a それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです。

父と子が一つになっているのは、父と子の関係が確立しているからです。子と呼ばれるのは、第一に、父に従うからです。父のいうことに従順だから、子と呼ばれます。イエス様は、神の子として、神の言われていることを見て行っています。パウロも、キリスト者たちに神に倣うものになりなさいと言っています、「エペ 5:1 ですから、愛されている子どもらしく、神に倣う者となりなさい。」

そして、その従順は、「愛されている」ということに基づいています。「父が子を愛し」とありますね。子は、何も行うことはできないとイエス様は言われますが、それは束縛されたり、能力がないということではなく、父に愛されているがゆえ、その愛の安心感があるからこそ、父の言われること以外、何かしようと思うことができないという意味です。そして、父が子に愛しているので、「ご自分がすることをすべて、子にお示しになる」とあります。聖書では、神の人と呼ばれている人が、神に愛されているから、ご自身がすることをそのしもべに話しています。アブラハムに対して、ソドムとゴモラに対して行われることを明かされました。モーセにも、顔と顔を合わせて語られました。ダビデにも、これから永遠の将来に至る幻を、主が示されました。ダニエルは、世の終わりに大いなる戦があって、その後にキリストがイスラエルを救いに来られる幻を見せられますが、その時に、「特別に愛されている人よ」と呼ばれています(10:19)。

20b また、これよりも大きなわざを子にお示しになるので、あなたがたは驚くこととなります。21 父が死人をよみがえらせ、いのちを与えられるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。

今、ユダヤ人たちは、38 年間、立つことのできなかつた病人が立ち上がるのを見ました。これから、さらに大きなわざを示すので、あなたがたは驚くと言われます。それが、死んでいる者に命を与える、ということです。死人をよみがえらせ、命を与えるなど、神にしかできないことです。しかし、イエス様は、神の御子のゆえ、父からその大いなる力が与えられているということです。

2B 裁く権威 22-30

1C 子への敬い 22-23

22 また、父はだれをもさばかず、すべてのさばきを子に委ねられました。23 それは、すべての人が、父を敬うのと同じように、子を敬うようになるためです。子を敬わない者は、子を遣わされた父も敬いません。

最後の審判を行われるのは、神です。正義と公正をもって、あらゆることが神の前に持ってこられ、その一つ一つを裁かれるのは神です。その裁きを、子が行うということです。ダビデが、自分がこの世を去ろうとしていた時に、息子ソロモンに、自分に反逆した人物らに対して、公正な裁きを任せたように、神が御子に裁きを任せたのです。神がそれを行われたのは、裁くということは、そこに権威があるのですが、子が父と同じように敬われるためです。王は、その統治と裁きのゆえに敬われますが、同じように王子も敬われるように、王子に裁く権威を委ねられたということです。

なので、使徒たちは、神の御名をあがめるのはさることながら、イエスの御名を高くかかげました。「使 4:12 この方(イエス・キリスト)以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人間に与えられていないからです。」とペテロが言いました。パウロは、こう言いました。「使 17:31 なぜなら、神は日を定めて、お立てになった一人の方(イエスのこと)により、義をもってこの世界をさばこうとしておられるからです。神はこの方を死者の中からよみがえらせて、その確証をすべての人にお与えになったのです。」

2C 永遠のいのちに至る救い 24-26

24 まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています。

イエス様は、ご自身にすべての裁きが委ねられていることを語り、それからそのすべての権能を持った方が、救い主であることを伝えておられます。イエス様と、父なる神は不可分です。イエス様の言葉を聞いたならば、それは神ご自身の言葉であり、そうして神を信じることになる。イエスによって神を信じる者は、永遠のいのちを持ちます。永遠のいのちとは、永遠の神のいのちであり、永遠は神にしかないご性質です。そして、この方が、罪の中に死んでいる者をその新しい命によって、生かします。罪によって裁かれることがないようにしてください。

ちなみに、ここは新しく信仰を持った方々には、しばしばお見せする御言葉です。なぜなら、イエスを信じて救われたのに、自身がなくなり、自分は救われたのか？救いを失ったのではないかと不安になるからです。しかし、ここまで明確なものはありませんね、永遠の命を持ったのです。信じた時点で、死からいのちに移っています。ところで、ここでの「死」というのは、霊的な死です。罪のゆえに、神から離れ、神の命から離れていることです。そこから、新しく生まれて、神の命にあずかります。「エペ 2:1-2 さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」

25 まことに、まことに、あなたがたに言います。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。それを聞く者は生きています。26 それは、父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、

子にも、自分のうちにいのちを持つようにして下さったからです。

イエス様は、ヤイロの娘をよみがえらせました。そして、ラザロをよみがえらせます。「ラザロよ、出てきなさい！」という声によって、死人がそれを聞き、よみがえったのです。そして、なぜイエス様がそのようなことができるのか？という、父が命を持っているように、子にも命を持つようにして下さったから、とのことです。命というの、神のみが持っているものです。人をよみがえらせるところの命です。それが、子にも与えられているということです。

3C 体のよみがえりによる裁き 27-30

27 また父は、さばきを行う権威を子に与えて下さいました。子は人の子だからです。28 このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。29 そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。

神は、人々をよみがえらせ、それでもって悪を行う者には罰を、善を行った者には永遠の命を与えられるとしています。神が裁かれるために、すべてのものが、死んでいてもよみがえらせて、連れてこられるということです。このことを、キリストが来られる時に行われることが、ダニエル書に預言されています。「ダニ 7:13-14 私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲とともに来られた。その方は『年を経た方』のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と栄誉と国が与えられ、諸民族、諸国民、諸言語の者たちはみな、この方に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」27 節で、「子は人の子だから」とあるのは、ここダニエルの預言から来ています。それから、ダニエル書 12 章 2 節に、「ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。」とあります。このことをイエス様は 29 節で、お語りになっているのです。わたしこそが人の子キリストで、さばきを行う権威を持っており、そして、人の子の声によって、すべてのものが甦り、すべての人が裁かれる、ということです。

30 わたしは、自分からは何も行うことができません。ただ聞いたとおりにさばきます。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたしは自分の意志ではなく、わたしを遣わされた方のみこころを求めます。

父は子に裁く権威をゆだねていますが、しかし子は父から聞いたとおりに裁くだけです。ここでも、三位一体の姿が見えます。裁きにおいて、父と子は一致しているのです。だから、イエス様が自分の裁きは正しいと言われているのは傲慢なことではなく、むしろ謙遜しています、自分が勝手に裁いているのではなく、父の裁きなのだから、だからこの裁きは正しい、ということになります。

これが私たちの神との関係にもつながります。私たちは、自分の考えや感情に頼らずに、ただ神が言われているから、イエス様が言われているからという理由だけで判断を下すのであれば、それは真実で、正しいのです。主により頼むことが、自分たちを正しくします。「箴 3:5-6 心を尽くして【主】に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる。」

2A イエスについての証言 31-47

イエス様は、ここまで大胆に、ご自身が彼らを含めてよみがえらせ、そして裁きの座についてさばくのだと言われています。こんなに大それたことというなら、証拠がなければいけません。それをイエス様は次に、この宣言は証言があるのだとして、語り始められます。

1B 他に証言する者 31-40

1C バプテスマのヨハネ 31-35

31 もしわたし自身について証しをするのがわたしだけなら、わたしの証言は真実ではありません。
32 わたしについては、ほかにも証しをする方がおられます。そして、その方がわたしについて証しする証言が真実であることを、わたしは知っています。

C.S.ルイスというイギリスの小説家、あの「ナルニア王国」の原作者ですが、彼がこう言いました。「イエスは、嘘つきか、精神異常者か、もしくは主である。」つまり、尊敬すべき偉大な教師、指導者という、中途半端な評価はできないということです。ニコデモが、そういった姿勢でイエス様に近づかれましたね。あなたは、神から来た教師であると私たちは知っています、と。けれども、イエス様はそれを一蹴されて、「人の子を信じることによって、永遠のいのちを持ちます」として、ご自身を教師以上の者とされました。ですから、ユダヤ人指導者は、安息日についての解釈の対立で怒っていただけでなく、この方が神と同等にしていることに怒っていたのです。大ウソつきか、精神に異常をきたした狂人か、あるいは本当にその通りで、主ご自身であるかのどれかです。

イエス様は、ご自身は、ご自身についての証言は正しいことを知っておられます。けれども、それだけであれば真実と確認できないとも言われます。モーセの律法にも、二人か、三人の証人がいて、事実と確認されるという内容があります(申命 19:15)。キリスト教は、盲目になって信じなさいということを教えません。イスラム教は、ただ神に従え、ムハンマドが預言者であると告白しなさい、そうすれムスリムなのです、と教えます。しかし、キリスト教は盲目になって信じることを教えていません。頭を使って、よく考えて、それで確かに、この方は救い主であり、神の子であると信じることができる、十分な根拠を提供しています。

33 あなたがたはヨハネのところに人を遣わしました。そして彼は真理について証しました。34 わたしは人からの証しを受けませんが、あなたがたが救われるために、これらのことを言うのです。

35 ヨハネは燃えて輝くともしびであり、あなたがたはしばらくの間、その光の中で大いに喜ぼうとしました。

イエス様が初めに挙げられたのは、バプテスマのヨハネです。私たち異邦人には、このインパクトは分かりにくいですが、福音書のすべてがバプテスマのヨハネから語り始めていることを見れば、その重要性がお分かりになると思います。彼は、マラキ書やイザヤ書に書かれている、メシアが来られる前に来る先駆者についての預言を成就させました。そして、彼はユダヤ人たちに受け入れられる預言者となりました。そしてその彼が、イエスを来るべき救い主であると教えていたのです。ユダヤ人指導者たちにも、ヨハネのところに行って、バプテスマを受けようとした者たちもいました(マタイ 3:7)。

2C 良いわざ 36

36 しかし、わたしにはヨハネの証しよりもすぐれた証しがあります。わたしが成し遂げるようにと父が与えてくださったわざが、すなわち、わたしが行っているわざそのものが、わたしについて、父がわたしを遣わされたことを証しているのです。

二つ目の証言は、イエス様が行われている業です。イエスの奇跡の業が、父なる神からのものであり、この方が神と同等であることを示しているということです。使徒ヨハネは、カナの婚礼から始まり、王室の役人の息子の癒し、そして今、ベテスダで 30 年間歩けなかった病人が歩いたところを見ました。これらが、神ご自身の業であることを示しています。イエス様は後に、ユダヤ人指導者たちにこう言われます。「ヨハ 10:37-38 もしわたしが、わたしの父のみわざを行っていないのなら、わたしを信じてはなりません。しかし、行っているのなら、たとえわたしが信じられなくても、わたしのわざを信じなさい。それは、父がわたしにおられ、わたしも父に在ることを、あなたがたが知り、また深く理解するようになるためです。」

ですから、私たちが伝道をする時に、福音書を読んでもらうことはとても良いことです。イエス様が単なる、良い教えをする教師以上の存在であることは、すぐに分るでしょう。愛しなさいと説かれたイエスは、いたるところで病人を治し、悪霊を追い出され、あるところでは水の上を歩き、そして死人をよみがえらせました。そして、使徒たちは後に、聖霊の力によって、病人を治し、悪霊を追い出しました。良いわざというものは、人々に反論を与えません。そのまま信じるに値する力を与えます。イエス様が中風の者に、「罪が赦された」と宣言されましたが、その権威があることを示すために、その癒しを行われました。しばしば言われるのは、「行いによる証し」です。行いやわざによって示せば、そこに福音が内包している、包み込まれているのです。

3C 父なる神ご自身 37-38

37 また、わたしを遣わされた父ご自身が、わたしについて証しをしてくださいました。あなたがた

は、まだ一度もその御声を聞いたことも、御姿を見たこともありません。38 また、そのみことばを自分たちのうちにとどめてもいません。父が遣わされた者を信じないからです。

三つ目の証言は、父なる神ご自身によるものです。イエス様が公の活動を始められる時に、ヨルダン川でバプテスマのヨハネから、バプテスマを受けられました。「ルカ 3:22 聖霊が鳩のような形をして、イエスの上に降って来られた。すると、天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」

けれども、彼らはその場にいなかった、あるいはいたとしても、不信仰によって、その声は聞こえなかったと思われます。ただ、ここではそのバプテスマの場だけでなく、それ以上のことを話しておられるのでしょう。かつて、シナイ山のところでイスラエル人は、天から降りてこられた神の声を聞きました。そしてモーセが主と会い、主の言葉を聞いて、それを受け入れました。ところが、今、バプテスマを受けられた時に天からの声があつて、確かにこの方は神のことばを語っておられるはずだ、とならなければいけないのに、彼らはその預言者を受け入れていないので、神のことばも心に留めることはできていない、というのです。問題は、知識や啓示が与えられているのか？ではなく、信じていないので、聞こえるものも聞こえない、見えるものも見えていないということですね。

4C 聖書 39-40

39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているものです。40 それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。

四つ目の証言は、聖書そのものです。ここでは、もちろん新約聖書はないので、旧約聖書のことです。旧約聖書の中で永遠のいのちがあると思って調べているが、その聖書が、イエスについて証しているということです。旧約聖書、そして新約聖書で、最も大きな主題は「イエス・キリスト」ご自身です。旧約聖書が、イスラエル民族の歴史で、新約聖書が、イエスの生涯という説明を聞いたことがあります。これは誤りです。新約も、イスラエル民族の中で起こっている話であり、その救いが異邦人にも及んだということでもあります。ユダヤ人の間で起こった話を記録しています。そして旧約こそが、キリストが来られるのだということを、長い歴史をかけて、神は人々に伝えていったと言っても過言ではないのです。初心者の方々には、「旧約は、キリストが来るよ、ということを経証し、新約はそのキリストが来たよ、ということを経証しています。」とお話しています。ある牧師が、ユダヤ教正統派の人に、こう言いました。「私は、旧約聖書があるからキリスト者なのです」これは実に正しい言葉なのです。

使徒ペテロが、第二の手紙で、高い山でイエス様の変貌したその栄光の姿を目撃した話をしました。それは、主が再び来られることを疑い、あざけている者たちが表れているからということです。

だから、その栄光の姿を既に私は見た、ということです。ところがペテロはこうも言っています、「Ⅱペテ 1:19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに心を留めているとよいのです。」さらに確かな預言なのです。その預言をもって、主が明けの明星のようにして来られる時まで、心に留めておくといっています。初代教会において、使徒たちは信者たちが、主が来られる預言について知っていること、また教えていたことは前提となっていました。パウロは、信じて間もないテサロニケ人たちに、荒らす忌むべき者、反キリストが、エルサレムの神殿の中に入って、自分を神と宣言することについて話していたことを話しています(Ⅱテサ 2:4-5)。いかがでしょうか、私たちキリスト教会が、それほど預言のことばを大事に持っているのでしょうか？初めに来られた時の預言は、既に三百以上あると言われています。これが偶然その通りになる確率は天文学的な低さです。

ところが、問題があります。イエス様は、「いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません」と言われます。聖書を調べているはずの者たちが、いのちを得ていないという問題です。いかがでしょうか？聖書をどれほど知識として持っていたとしても、いのちを得ていないのです。私たちは、聖書をどれだけ知っているかどうかで、その人がどれだけ霊的かどうかを推し量ってしまいがちですが、いいえ、そんなことはありません！聖書をそれほど知らないだろうと思われる兄弟、あるいは姉妹が語ることばが、深い霊的真理を語っているということは多々あるのです。その逆もかりで、聖書を細かく調べているのに、そこから命が流れ出ない人たちもいるのです。ひとえに、「わたしのもとに来ようしない」ということです。イエスのところに行っている人は、真理を知っています。行っていない人は、どんなに聖書を調べても、真理を知らないし、いのちを持っていません。

2B 父から受ける栄誉 41-47

こうして、イエス様はユダヤ人指導者たちを叱責し始めています。主はさらに、彼らにある問題を取り上げられます。それは、「自分たちの栄誉を求めている」ということです。栄誉といっても、表彰状のようなものを求めているということではありません。根本的に、自分自身のことを求めている姿です。他の人々から自分がどう見られているのか、という評価を求めていることです。山上の説教で、「人に見られるために、善行を行っている」と主が言われたことです。

1B 人からの栄誉 41-44

41 わたしは人からの栄誉は受けません。42 しかし、わたしは知っています。あなたがたのうちに神への愛がないことを。

イエス様はおそらく、ベテスダの池での癒しについて語られているのでしょう。主は、男を見て、ずっとそのような状態なのを見て、それで起き上がらせました。神は、足なえの人が起き上がり、目の見えない人が見えるようになり、耳の聞こえない人が聞こえるようになることを御心としておら

れました。神を愛し、そして人に憐れみがあるからこそ、そのことを行われたのです。けれども、すぐにその場を離れました。人から、その働きが認められる必要はないのです。しかし、彼らにはその愛が留まっていません。自分の立ち位置を、人々から評価されていることによって定めています。

いかがでしょうか、私たちが、主から言われたことだからということで、果たして動いているでしょうか？神に仕えているでしょうか？神の愛によってのみ、動いているか？

43 わたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。44 互いの間では栄誉を受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたが、どうして信じることができるでしょうか。

イエス様は、ご自身が父から来たのだと言われた時に、彼らは冒涇だと受け止めましたが、いえ、主は謙遜であります。ご自身が語っているのでも、行っているのでもない、ただ父から言われたことを行っているのだというのは、自分ではないということを語られているのであり、ご自身を低くされているのです。それが、「父の名によって来た」ということです。

興味深いことに、「もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。」と言われています。これは誰のことでしょうか？ここでは、キリストが父の名によって来られているのに拒むということを話していますから、偽キリストのことでしょう。反キリストが自分の名によって来るということです。そうすれば、彼らは受け入れるということです。反キリストが現れる時に、ダニエル9章27節を見ますと、「多くの者と堅い契約を結び」とあります。この多くの者とはユダヤ人のことで、エルサレムの神殿に関わる人々のことです。ですから、ここにいる宗教指導者の人たちです。父なる神の名によって来ないで、自分の名によって来ているのに受け入れてしまうのです。この人物は後から、自分自身をいかなる神よりも高くして、自らを神とすると預言されています。

どうして、そんなことをしてしまうのか？それは、「互いの間では栄誉を受けても、唯一の神からの栄誉を求めない」からだとします。カルト的な指導者のところに人々が多く集まります。そのカルト的指導者が、神とキリストの名ではなく、自分自身の権威をふるって横暴になっているのに、なぜ追従するのか？それは、自分自身も栄誉を求めているからです。ここでの栄誉とは、自尊心であるとか、自分を認めてくれるとか、神ではなく自分を求めていることを話しています。互いに認め合ってどうするのでしょうか？でも、人間はそれを良いこととしてやっていますね。陰湿ないじめでさえ、それです。誰かを敵にすることによって、敵以外の他の人たちが互いに敵対しないように、互いに認め合うように仕向けているだけです。こうやって、神ではなく、人に目を向けさせているのです。現代のヒューマニズムです。神ではなく、人間的なものを求めているのです。そうした中で、偽の救世主が現れます。

2B 訴えるモーセの律法 45-47

45 わたしが、父の前にあなたがたを訴えると思っはなりません。あなたがたを訴えるのは、あなたがたが望みを置いているモーセです。46 もしも、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことなのですから。47 しかし、モーセが書いたものをあなたがたが信じていないのなら、どうしてわたしのことばを信じるでしょうか。」

イエス様は、彼らが自分たちはモーセの座に着いていると思っていることを知っておられました。自分たちがモーセの律法を正しく解釈する教師たちであり、イエスはモーセの律法に違反しているから、彼は消えなければいけない人間だと思いました。イエス様は、ここまで語られて、彼らを責め、訴えているのではないと言われます。むしろ、彼らがモーセの律法を守っているものだとしているけれども、実はモーセの律法が彼ら自身を責めているのだということです。

これほど皮肉なことはありません。「私たちこそが、聖書的なグループだ」と自負していて、聖書はそうした高慢を責めているのを知らないのです。彼らが律法を誠実に見ていけば、その律法がキリストを証ししていて、イエスはキリストであることを知ることができるのです。彼らはモーセの書いているものさえ、実は信じていなかったのです。だから、イエス様の言葉も信じませんでした。これは今にも通じる警告です、「私たちこそ聖書を知っているのだ」とするのは、まさに自分を聖書の位置に置くことです。聖書を本当に知っていれば、そんな態度は持ちようがないでしょう。自分の解釈や見解に限界があることを知っているはずです。そうやって、ユダヤ人指導者は自分自身を見失い、盲目になり、神に仕えているとしながら、神から来られた方を迫害したのです。そう言った人はキリストを知らないし、聖書自体も知りません。ダビデは祈りました、「詩 19:13 あなたのしもべを傲慢から守ってください。彼らが私を支配しないようにしてください。そのとき私は大きな背きから解き放たれて全き者となるでしょう。」

ベテスダの池で癒された男にも言えますが、どうか私たちが、自分の持っているものを捨て、キリストのところに来ることができますように。自分というものを捨てて、この方のいのちのみにあずかることができますように。キリスト、この方以外に誇りとすることがないように。他の兄弟や姉妹を見下すことがないように。それが、キリストの食卓に着くことです。キリストを中心として、兄弟たちとパンを裂くことであります。